資料10

現地研修会（平成 26 年 5 月 23 日）

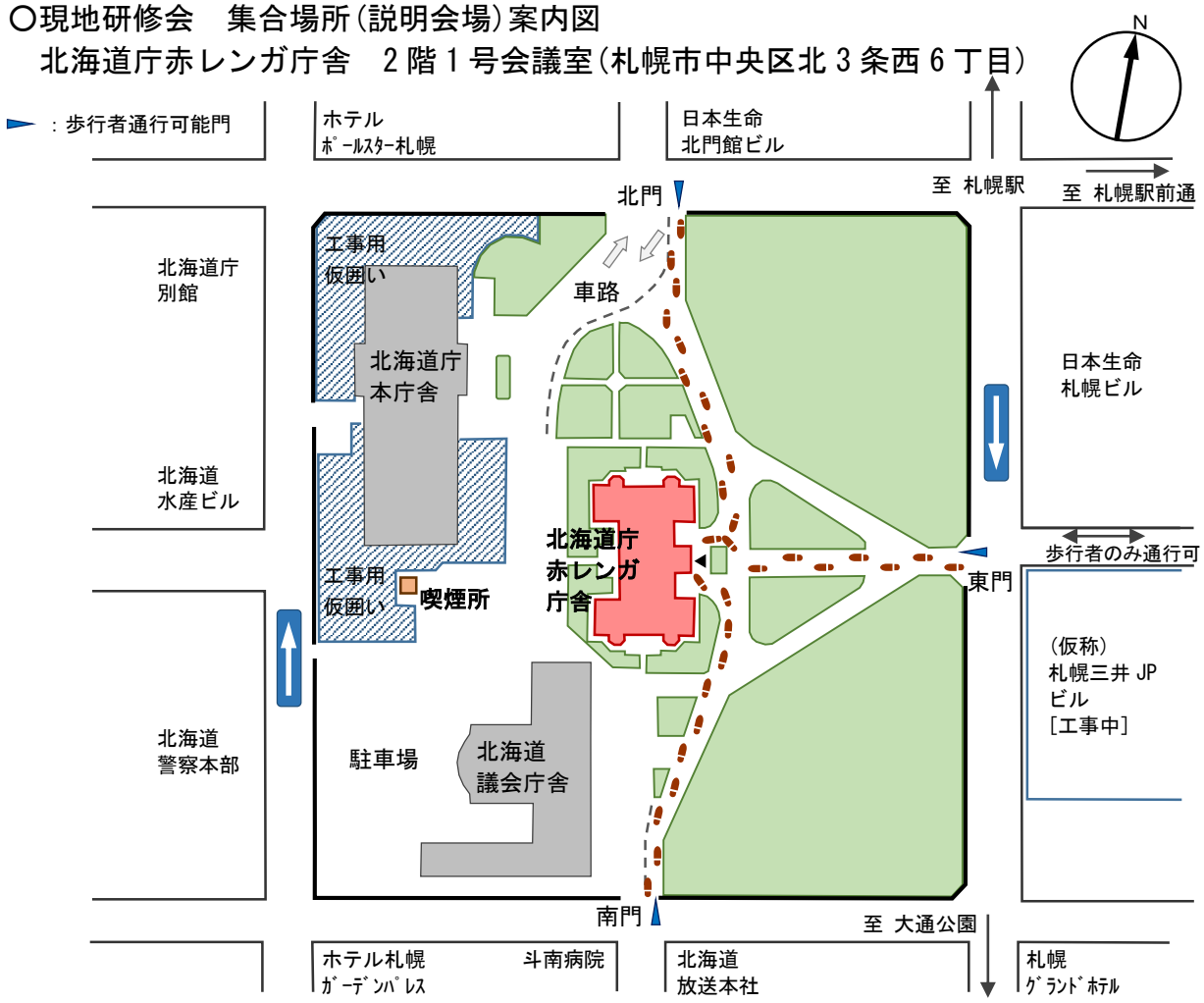
北海道

第 24 回住宅市街地整備推進協議会全国会議　現地研修会スケジュール

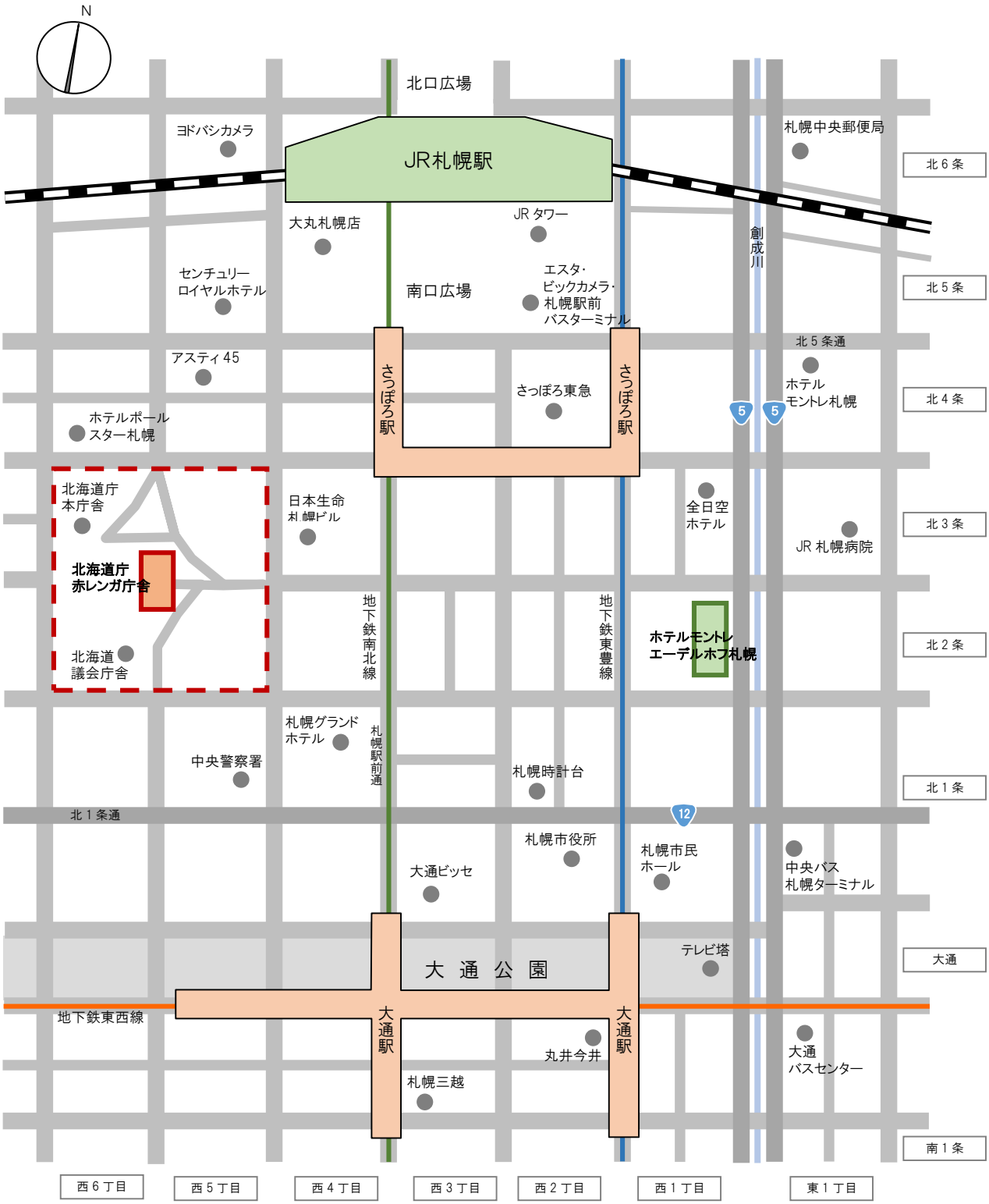
日時	平成 26 年 5 月 23 日（金） 8:55～12:00	
研修場所	ＪＲ琴似駅前地区、小樽駅前地区	
行程	受付開始	8:45
	集合（道庁赤レンガ庁舎　2 階 1 号会議室）	8:55
	概要説明	8:55～9:15
	［バス移動］	
	ＪＲ琴似駅前地区視察	9:30～10:00
	［バス移動］	
	小樽駅前地区視察、小樽市街散策	10:35～11:15
	一次解散（小樽市街）	11:15
	［バス移動］	
	本解散（北海道庁前）	12:00

○現地研修会　集合場所（説明会場）案内図

北海道庁赤レンガ庁舎　2 階 1 号会議室（札幌市中央区北 3 条西 6 丁目）



■北海道庁周辺地図


N
北口広場
ヨドバシカメラ
JR札幌駅
札幌中央郵便局
北６条
大丸札幌店
JR タワー
創成川
センチュリー
ロイヤルホテル
南口広場
エスタ・
ビックカメラ・
札幌駅前
バスターミナル
北５条
北５条通
アスティ 45
さっぽろ駅
さっぽろ東急
さっぽろ駅
ホテル
モントレ札幌
北４条
ホテルポール
スター札幌
北海道庁
本庁舎
日本生命
札幌ビル
全日空
ホテル
北３条
JR 札幌病院
北海道庁
赤レンガ庁舎
地下鉄南北線
地下鉄東豊線
ホテルモントレ
エーデルホフ札幌
北２条
北海道
議会庁舎
札幌グランド
ホテル
札幌駅前通
中央警察署
札幌時計台
北１条
北１条通
札幌市役所
札幌市民
ホール
中央バス
札幌ターミナル
大通ビッセ
テレビ塔
大通
大 通 公 園
地下鉄東西線
大通駅
大通駅
丸井今井
大通
バスセンター
札幌三越
南１条
西６丁目
西５丁目
西４丁目
西３丁目
西２丁目
西１丁目
東１丁目

ＪＲ琴似駅周辺地区の再開発について

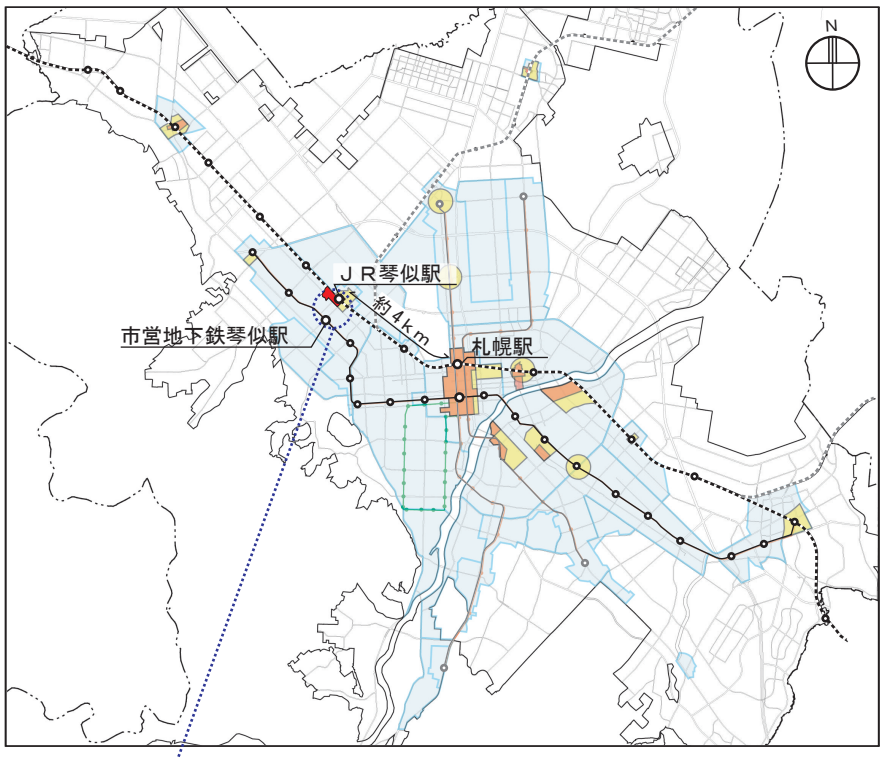
琴似地区は　都心部から北西に約４ｋｍに位置し、平成４年から約２０年間にわたり、再開発事業が継続しています。

ＪＲ函館本線の鉄道高架開通（昭和 63 年）や駅前広場等の基盤整備（平成元年）を契機に、ＪＲ琴似駅南口地区再開発事業による大規模商業施設がオープン（平成５年）、それに隣接する琴似３・１地区Ａ工区（平成 10 年）及びＢ工区（平成 14 年）が続き、平成 18 年春には、さらに、ＪＲ琴似駅北口地区と琴似４・１地区で工事が完了し、直近では平成 25 年度に、琴似４・２地区の建築工事が完了しました。

これら一連の再開発事業では、地元皆様のご理解ご協力のもと、積雪寒冷地でも安心・快適に歩いて暮らせるまちを目指してきました。集合住宅を中心に多機能複合施設群を整備し、２階レベルの屋内型歩行者空間（空中歩廊）で各街区や施設群を繋いでいく事業を行ってきました。

ＪＲ琴似駅周辺地区は、事業費約 510 億円（補助額約 81 億円）の再開発事業により、施行区域約 10ha のエリアに延べ床面積約 29 万㎡、供給住戸約 1200 戸、総延長約１ｋｍの空中歩廊が整備されま

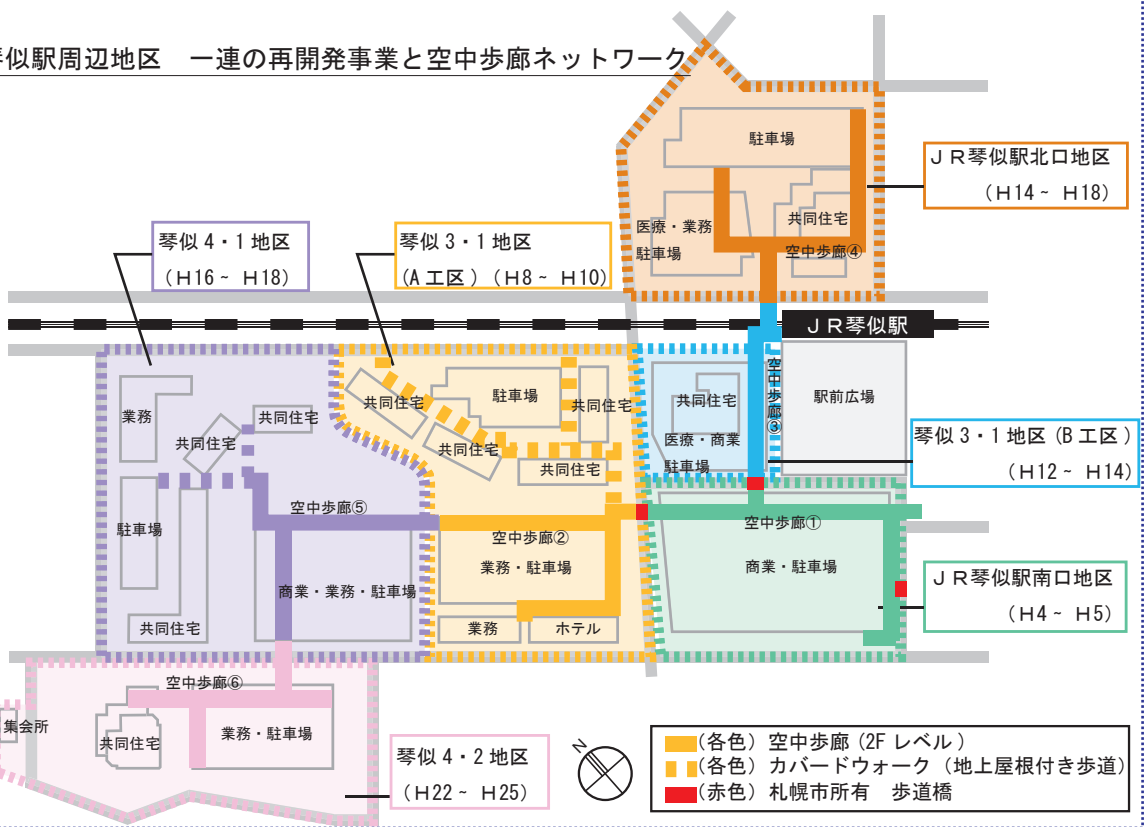
ＪＲ琴似駅周辺地区の位置



ＪＲ琴似駅周辺地区　開発の経緯

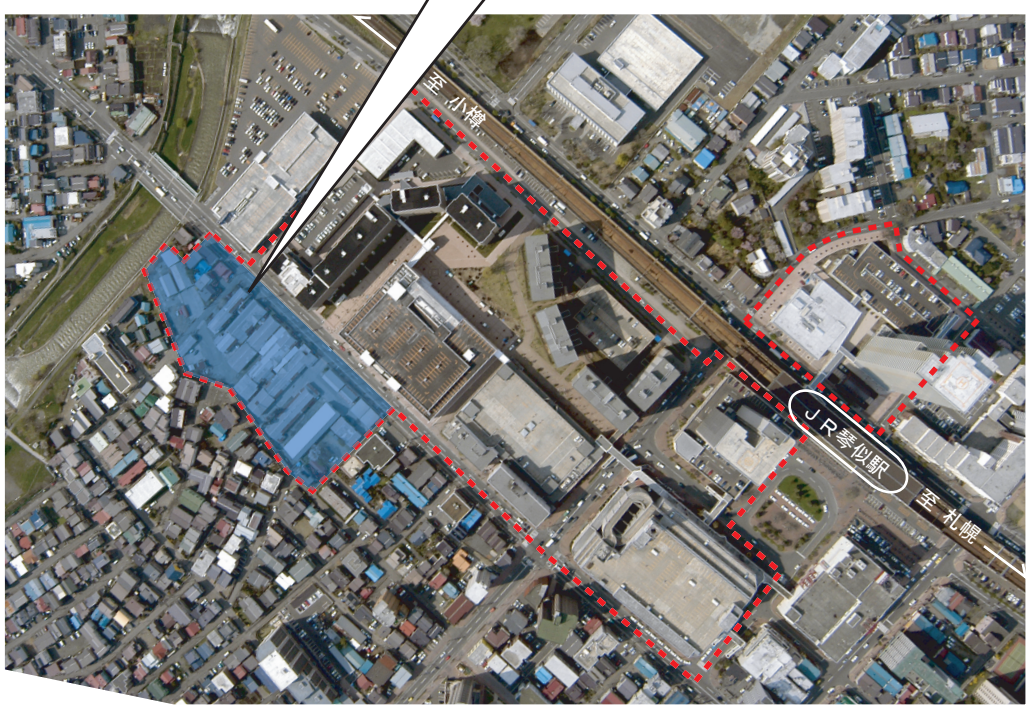
昭和63年	JR琴似駅高架事業
平成元年	JR琴似駅　駅広場等整備
平成4~ 5年	JR琴似駅南口地区第一種市街地再開発事業 主要用途:商業(イトーヨーカドー)
平成8~ 10年	琴似3･1地区(A工区)第一種市街地再開発事業 主要用途:商業、業務、ホテル、共同住宅
平成12~ 14年	琴似3･1地区(B工区)第一種市街地再開発事業 主要用途:商業、共同住宅
平成15~ 18年	JR琴似駅北口地区第一種市街地再開発事業 主要用途:商業、業務、共同住宅
平成16~ 18年	琴似4･1地区第一種市街地再開発事業 主要用途:商業、業務、共同住宅
平成22年~ 25年	琴似4･2地区第一種市街地再開発事業 主要用途:業務、共同住宅

ＪＲ琴似駅周辺地区　一連の再開発事業と空中歩廊ネットワーク



ＪＲ琴似駅高架事業前

再開発事業完成後

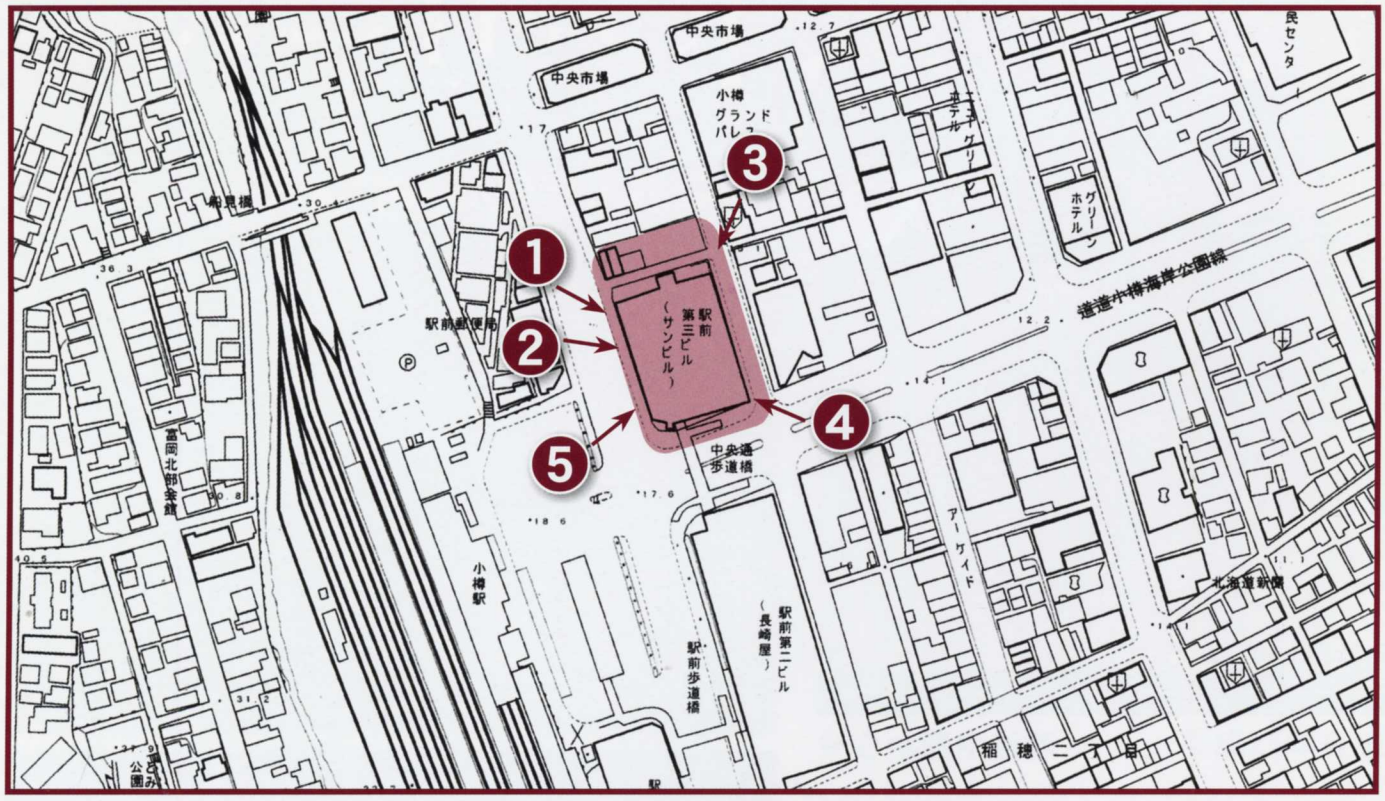


サンビルスクエア

小樽駅前第3ビル周辺地区
第一種市街地

再開発事業概要

従前敷地案内図



❶国道５号線より撮影

❷国道５号線より撮影

❸市道静谷線より撮影

小樽駅前地区第一種市街地再開発事業では、JR小樽駅前広場をはじめ３棟の施設建築物が新築されました。

この中の１つである「駅前第３ビル」は、昭和51年に完成し、ホテル・プール・店舗・銀行などで構成され、駅前の中心的存在として地域の活性化に貢献してきましたが、駅前第３ビルの約６割もの床面積を占めているホテルが、平成14年５月に営業停止にいたり、その後、営業の再開の目処がつかない状態が長く続いていました。

中心市街地の商店街は、中心部の居住人口の減少や大型商業施設の郊外進出、ホテルの営業停止が重なり客足にも影響が発生し、駅前第３ビルでは、空き店舗が目立つようになり、一刻も早い再生が望まれていました。

また、小樽の顔とも言える小樽駅前の一角に、老朽化した営業停止のホテルを抱える建築物があるという状況は、小樽のイメージダウンにもつながっておりました。

❹道道小樽海岸公園線より撮影

❺小樽駅方向より撮影

事業の契機・経過

(1)建物の再利用の検討

ホテルの営業停止(平成14年５月)を契機に、権利者をはじめ、駅前第３ビルの管理会社と小樽市で建物の再利用が可能かどうかの検討を開始しました。

その結果、専門家による商業診断の提案を受け、有料老人ホームやケアハウスなどの具体的な用途を想定し、各方面にホテルの購入及び再利用について依頼を行いました。

しかし、区分所有という複雑な権利関係を敬遠することや、設備等の老朽化の進行による改修費や耐震補強等に相当の費用がかさみ採算が合わないとのことから、話はまとまりませんでした。

(2)再開発手法の選択

建物の再利用が現実的に難しい状況になったことから、次に、再々開発の可能性について検討することとしました。

平成16年６月には、駅前第３ビルの権利者を始め商工会議所、管理会社、小樽市で小樽駅前第３ビル活性化検討会を立ち上げ再開発について具体的な検討を進めました。

まず、再開発の手法については、優良建築物等整備事業と第一種市街地再開発事業の２種類の検討を行い、事業のスピード、税制の優遇措置、採択条件などを考慮した結果、事業のスピードは遅いものの、税の優遇措置のある法定再開発(組合施行)として、調整を進めることとなりました。

(3)再々開発のハードル

再々開発を行うにあたり、一度再開発を行った建物について、再々開発を行うことが可能なのか、また、再開発事業の補助金を再度導入出来るかどうかについて、小樽市、北海道、開発局に検討をして頂いた結果、

①施設建築物の維持管理に支障が生じていること。
②改修等の方法によっては有効活用を図ることが困難であること。
③既に建築後相当期間を経過していること。
④都市機能の更新という新たな利用が行われること。
⑤通常の再開発の条件が揃っていること。

以上が整理されれば、再々開発の導入が可能との結論となりました。

(4)施工区域の拡大と新たな事業参加者の誘致

中心市街地の活性化と定住人口の増加を大きな目的として分譲住宅の誘致を進めてきました。

しかし、分譲住宅だけでは、大きな事業効果が見込めないことや、採算性の観点から、単なる駅前第３ビルの建替えのみではなく、事業地の拡大が必要となりました。

このことを受け、宿泊観光や中心市街地の活性化に寄与するホテルを誘致することとしました。

(5)権利者調整

各権利者は、駅前第３ビルの一刻もはやい再生が必要との共通認識をもっていたことから、法的手続期間を短縮することができる全員同意型で権利調整をおこなうこととしました。

(6)組合設立と都市計画決定

事業協力者が決定したことや一定の地権者合意の目処がついたことから、平成17年７月に再開発準備会を設立し、平成18年９月に都市計画決定、平成19年１月には再開発組合を設立しました。

同年３月に権利変換計画の認可を受け、同年６月に解体工事に着手、平成20年１月に施設建築物の建築に着手しました。

これと平行して、市街地再開発事業の国庫補助採択基準に基づき、今回の再開発事業が、新中心市街地活性化法に基づく中心市街地活性化基本計画の中に位置付けされ認定を受ける必要があったことから、駅前第３ビルの管理会社がまちづくり会社となり、また、中心市街地活性化協議会を新たに組織し、小樽市とともに中心市街地活性化計画の案を作成し、平成20年５月に中心市街地活性化計画の申請を行い平成20年７月に認定を受けました。

工事は順調に進み、平成21年４月には、商業施設がオープンし、同年５月にホテル・住宅が完工いたしました。

事業概要

名　　称	小樽駅前第３ビル周辺地区第一種市街地再開発事業
所 在 地	小樽市稲穂３丁目９番１号
敷地面積	3,560.32㎡
建築面積	2,754.04㎡
延床面積	26,658.25㎡
規　　模	鉄筋コンクリート造　地上17階　地下１階
建物高さ	59.835m
ホテル客室数	247室
住 戸 数	117戸
施 行 者	小樽駅前第３ビル周辺地区市街地再開発組合
特定業務代行者	大成建設株式会社
実施設計	大成建設株式会社一級建築士事務所
施　　工	大成・近藤共同企業体

用途地域等

用途地域	商業地域、防火地域、準防火地域、高度利用地区 小樽歴史景観区域、駐車場整備地区
敷地面積	3,560.32㎡
建ぺい率	100％（商業地域の防火地域での耐火建築物により）
容積率	600％

関係権利者数

種　別	件　数	権利変換	転　出
土地所有者	2名	0名	2名
土地・建物所有者	22名	10名	12名
借地権者	1名	1名	0名
借家権者	7名	0名	7名
合　計	32名	11名	21名

主な経過と今後のスケジュール

平成14年５月	旧国際ホテルの営業停止
平成17年７月	小樽駅前第３ビル周辺地区再開発準備会が設立
平成18年９月	都市計画決定の告示（高度利用地区・第一種市街地再開発事業）
平成19年１月	小樽駅前第３ビル周辺地区市街地再開発組合設立
平成19年３月	権利変換計画認可
平成19年６月	解体工事着手
平成20年１月	本体工事着手
平成21年３月	権利変換計画変更告示
平成21年４月	店舗プレオープン
平成21年５月	ホテル・住宅完工
平成21年６月	施設建築物の工事完了公告 権利変換計画変更告示
平成21年８月	再開発事業完了・組合解散（予定）

小樽都市計画第一種市街地再開発事業の決定（小樽市決定）

小樽都市計画第一種市街地再開発事業［小樽駅前第３ビル周辺地区］を次のように決定する。

名称		小樽駅前第３ビル周辺地区第一種市街地再開発事業				
面積		約0.6ha				
公共施設の配置及び規模	道路	種別	名称	幅員	延長	備考
		都市計画道路	3・3・7 小樽中央線	14.5～15.5m (27～28m)	約100m	整備済　都市計画決定済 ( )内は全幅員
			3・2・1 中央通	18m (36m)	約60m	整備済　都市計画決定済 ( )内は全幅員
		区画道路	市道静屋線	5.45m (10.9m)	約100m	整備済　( )内は全幅員
	公園及び緑地					
	下水道	整備済				
	その他の公共施設					

建築物の整備に関する計画	街区番号	建築物		敷地面積に対する		主要用途	備考	
		建築面積	延べ面積	建築面積の割合	建築物の延べ面積の割合		高度利用地区の制限内容	
	1	約2,800㎡	約27,000㎡ (約21,000㎡)	約8／10	約60／10	店舗 住宅 ホテル 駐車場	容積率の最高限度　60／10 容積率の最低限度　20／10 建築面積の最低限度　300㎡ 建ぺい率の最高限度　8／10 但し、耐火建築物にあっては9／10 但し、建ぺい率の最高限度は建築基準法第53条第３項各号のいずれかに該当する建築物にあっては1／10を、建ぺい率の最高限度の数値に加えたものをもって最高限度とする。	駐車場 約200台

建築敷地の整備に関する計画	街区番号	建築敷地面積	整備計画
	1	約3,600㎡	
住宅建設の目標	戸数	備考	
	約100戸		

(注)「建築物の整備に関する計画」欄のうち、延べ面積の（　）内は、建築基準法第52条の規定による容積率制限に関して建築基準法施行令第２条第１項第４号ただし書き及び同条第３項の規定に基づき算出される延べ面積。

建物用途・構造別現状

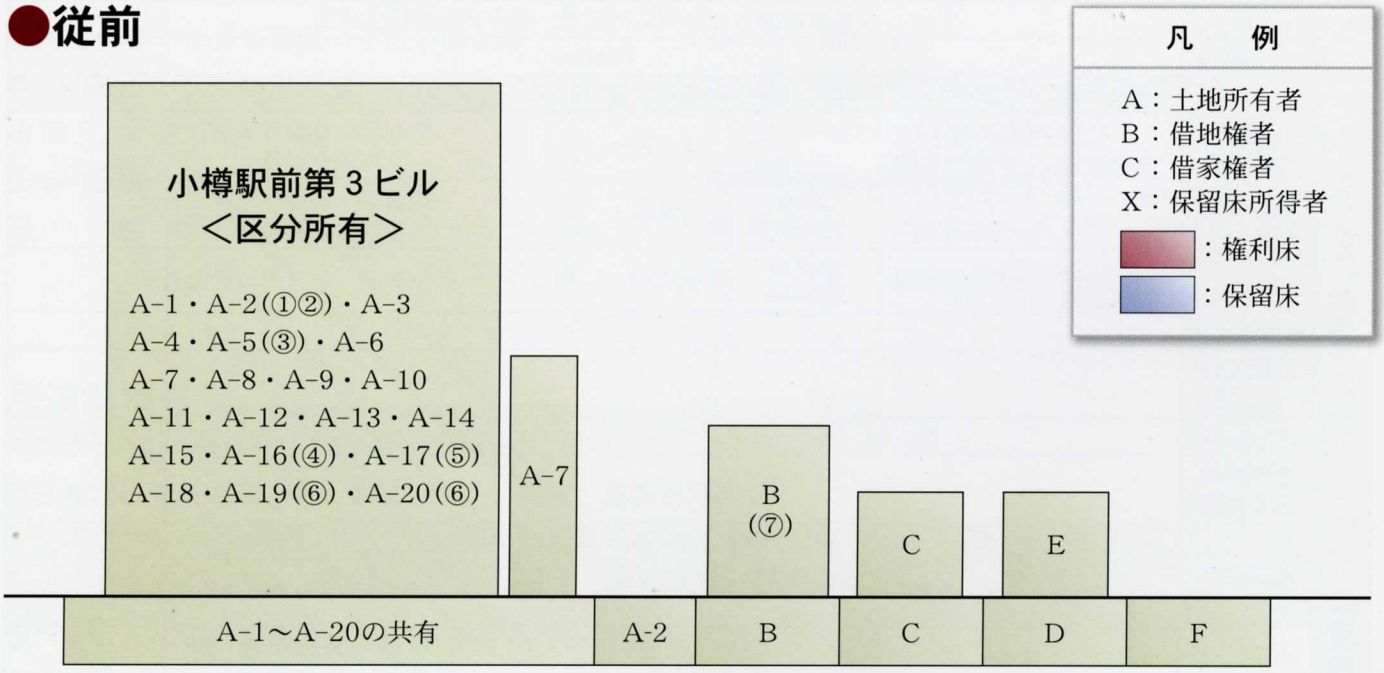
構造別	区分	建築面積	割合	延べ面積	割合
	耐火造	㎡	%	㎡	%
	非耐火	2,307.02㎡	100%	12,681.07㎡	100%
	合計	2,307.02㎡	100%	12,681.07㎡	100%

用途別	区分	延べ面積	割合	戸数	地区内建物の総棟数
	専用店舗	3,308.41㎡	26.09%	19戸	
	併用店舗	215.71㎡	1.70%	1戸	5棟
	専用住宅	301.16㎡	2.37%	2戸	地区内建物の総戸数
	その他	8,855.79㎡	69.84%	7戸	
	合計	12,681.07㎡	100%	29戸	29戸

権利変換方式　都市再開発法第110条特則型

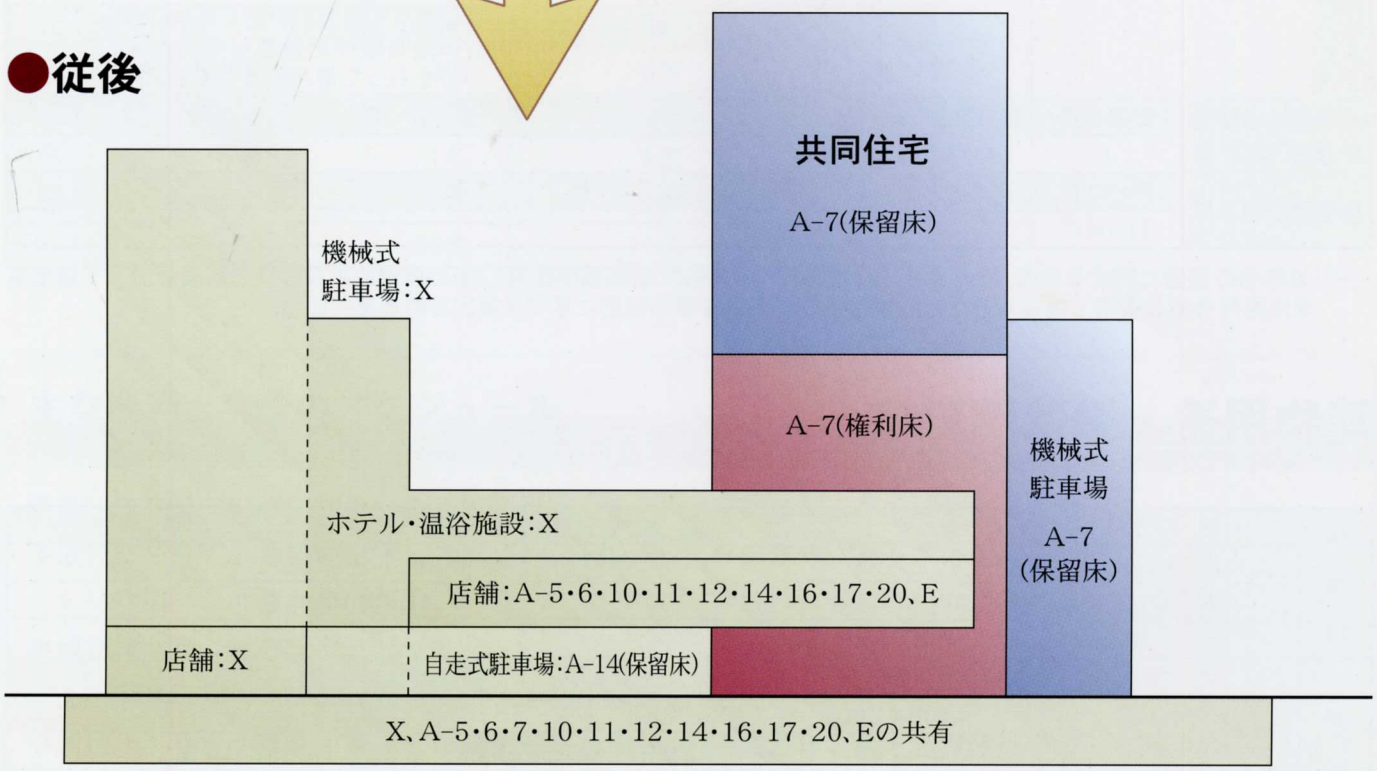
全員同意型　権利変換モデル図

●従前

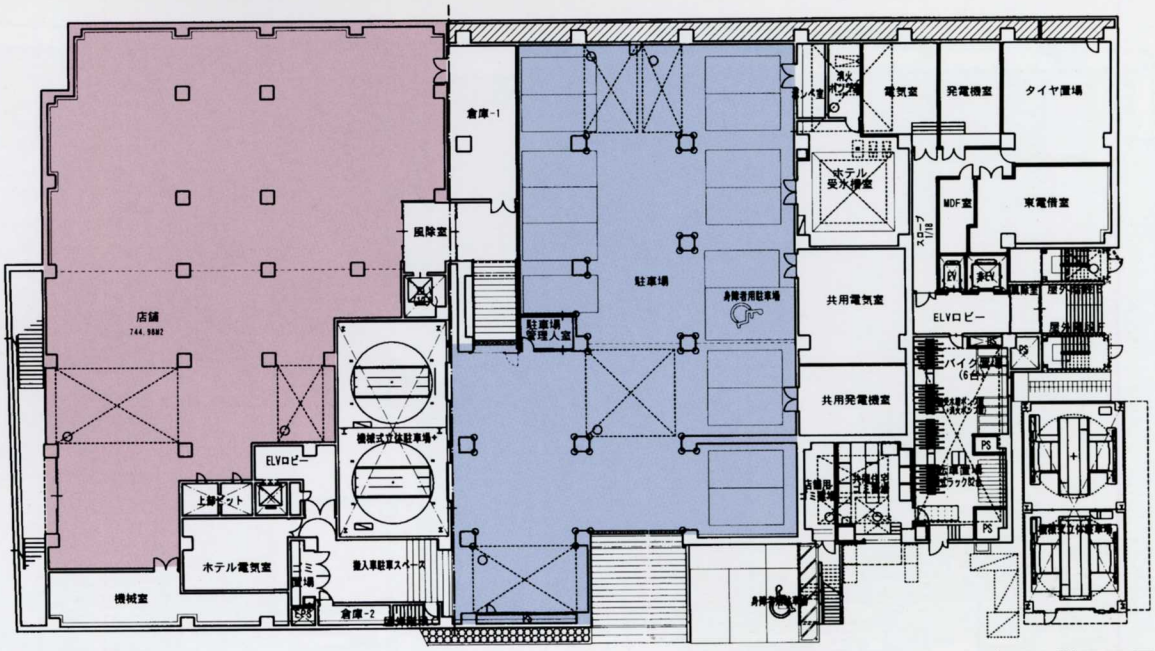


現況　A-1～A-20、B、C、D、F……土地所有者
E ……借地権者
①、②、③、④、⑤、⑥、⑦ ……借家権者

●従後



再開発後　A-1・2・3・4・8・9・13・15・18・19、B、C、D、F……金銭給付者
A-5・6・7・10・11・12・14・16・17・20、E …… 権利床取得者
X、A-5・6・7・10・11・14・16・17・E……保留床取得者



地下１階平面図

地下 1F

地下駐車場
サンビルパーキング

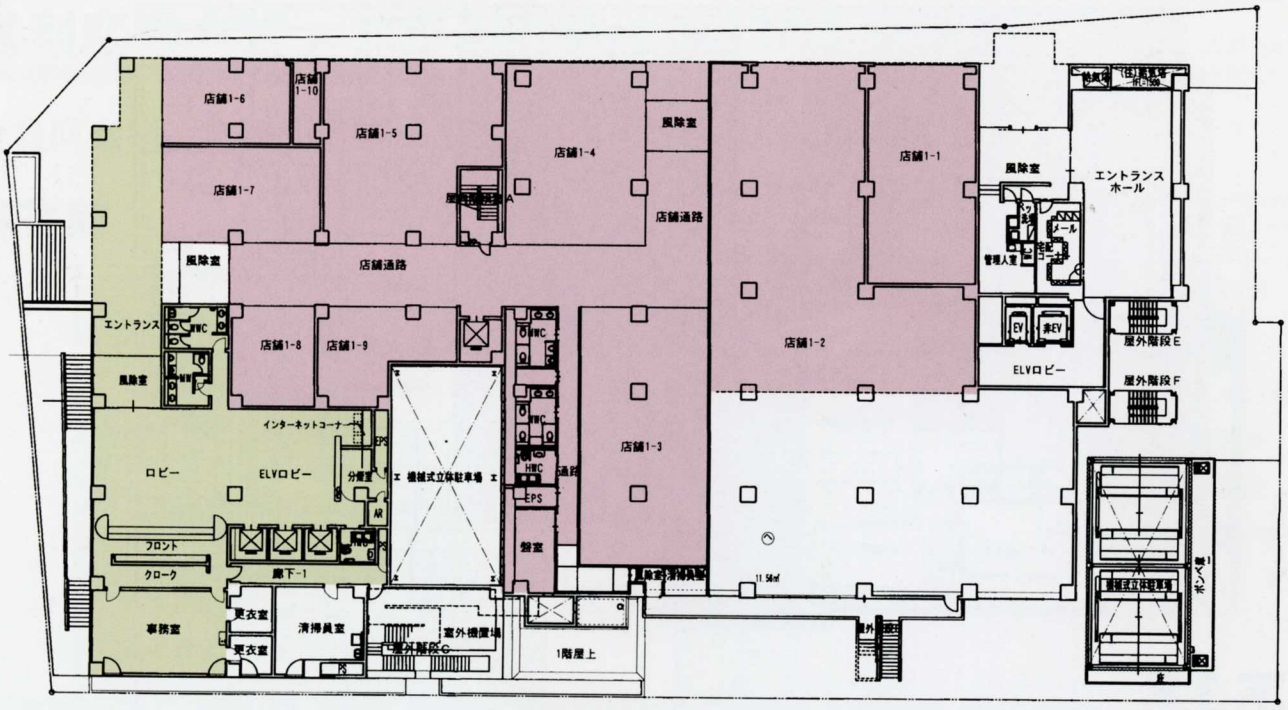
ツルハドラッグ 小樽駅前店

1F

CAKE&CAFE MARIE LAURENCIN
ケーキ&カフェ マリーローランサン

mister Donut

LeTAO
＊Northern Sweets Manner＊



1 階平面図

1F

岩織たばこ店

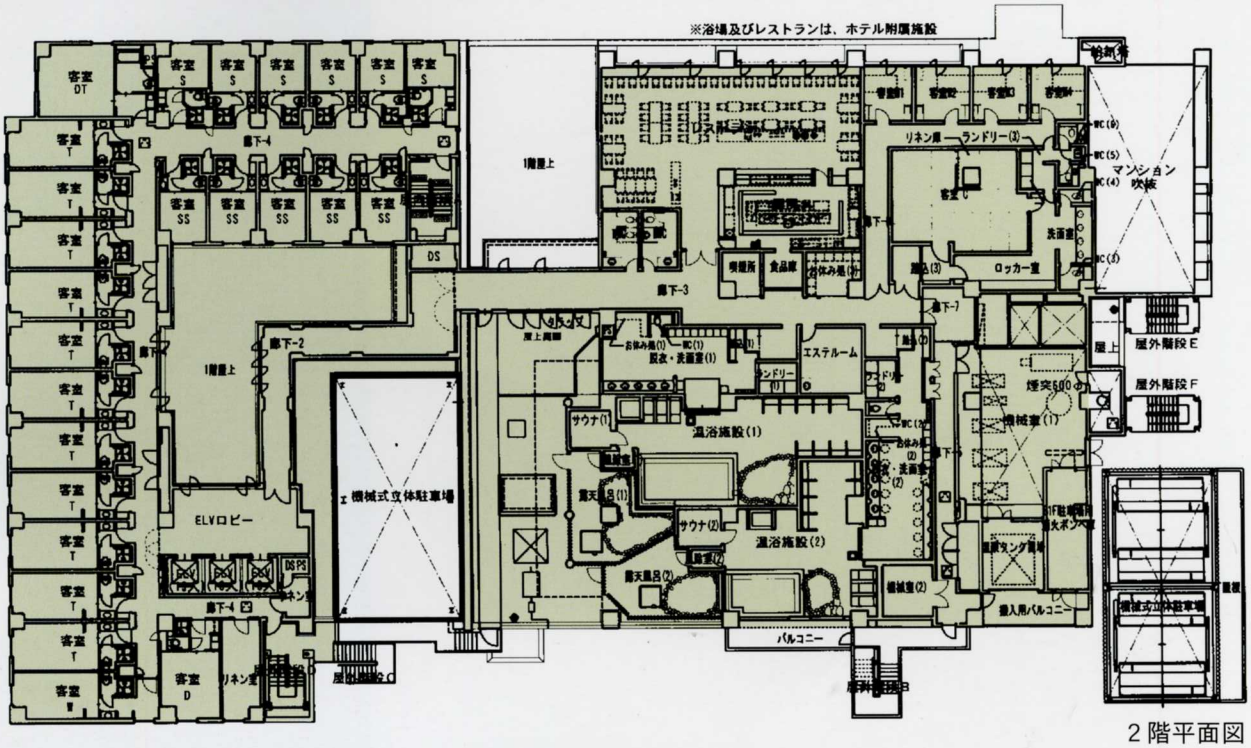
整体・リラグゼーション
健 康 館

コガイ歯科医院

イーアールエー
ERA ソロールホーム
REAL ESTATE

メガネサロン ルック

北洋銀行 小樽駅前支店

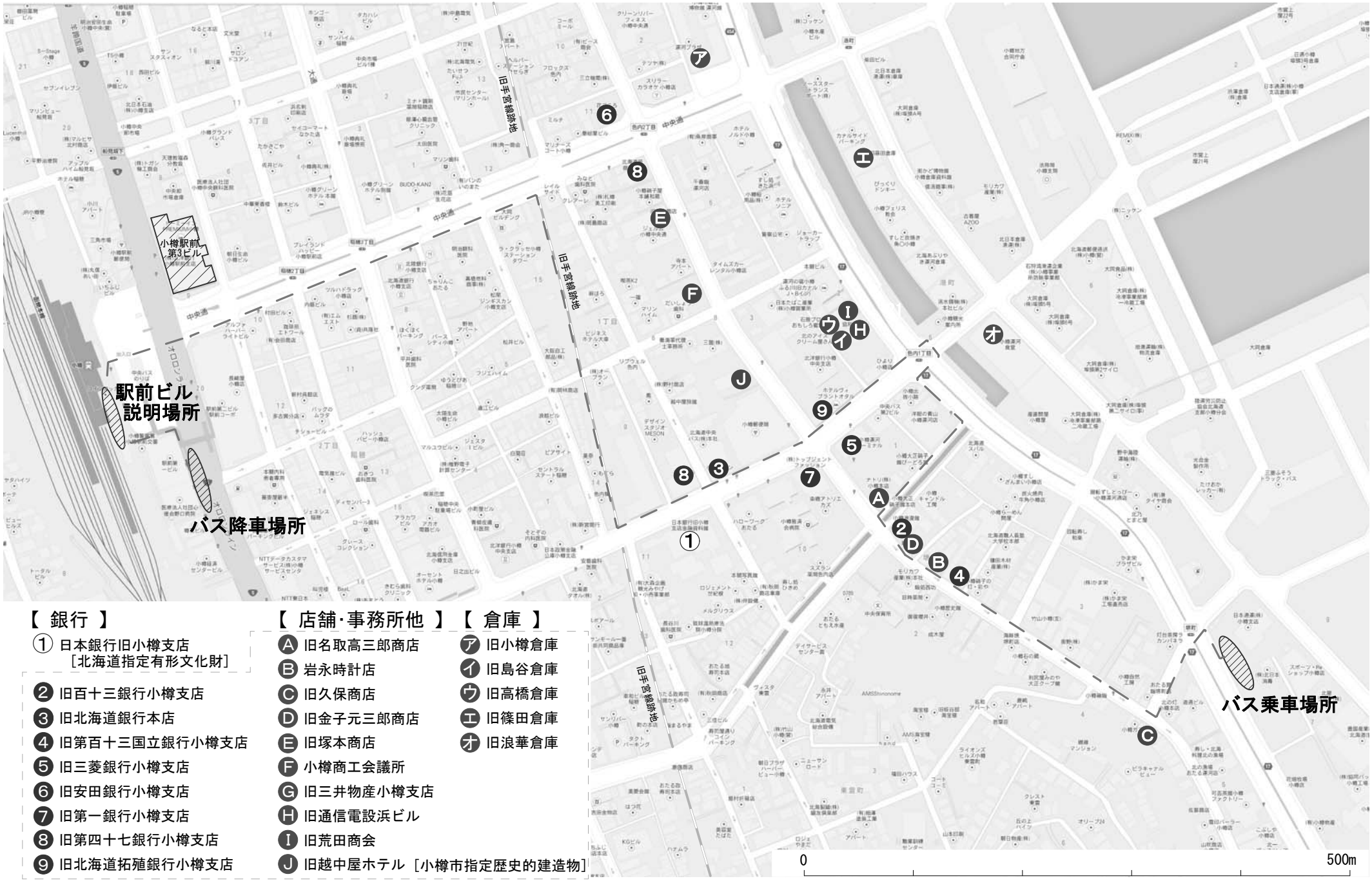


2階平面図

灯の湯 ドーミーイン PREMIUM（プレミアム） 小樽

プレミスト小樽ステーションタワー（117戸）

■小樽駅前地区視察、小樽市街散策ルートマップ



【 銀行 】

① 日本銀行旧小樽支店
［北海道指定有形文化財］

❷ 旧百十三銀行小樽支店
❸ 旧北海道銀行本店
❹ 旧第百十三国立銀行小樽支店
❺ 旧三菱銀行小樽支店
❻ 旧安田銀行小樽支店
❼ 旧第一銀行小樽支店
❽ 旧第四十七銀行小樽支店
❾ 旧北海道拓殖銀行小樽支店

【 店舗･事務所他 】

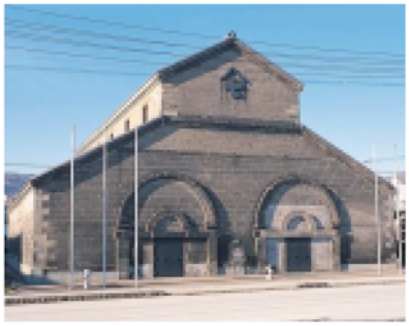
Ⓐ 旧名取高三郎商店
Ⓑ 岩永時計店
Ⓒ 旧久保商店
Ⓓ 旧金子元三郎商店
Ⓔ 旧塚本商店
Ⓕ 小樽商工会議所
Ⓖ 旧三井物産小樽支店
Ⓗ 旧通信電設浜ビル
Ⓘ 旧荒田商会
Ⓙ 旧越中屋ホテル［小樽市指定歴史的建造物］

【 倉庫 】

㋐ 旧小樽倉庫
㋑ 旧島谷倉庫
㋒ 旧高橋倉庫
㋓ 旧篠田倉庫
㋔ 旧浪華倉庫

倉　庫

凡例　指定番号　建物の名称
①所在地②建築年③構造④指定年月日



第1号　旧大家倉庫
①色内2-3-12②M24③木骨石造1階④S.60.7.23

石川県出身の海産商大家七平によって建てられ、建物の妻壁に宀の印があります。外壁に札幌軟石を使用し、越屋根と入口部分の二重アーチが特徴です。その雄大さと独特の姿は運河地区の石造倉庫を代表するもののひとつです。平成4年におもちゃ博物館として再利用されたこともあります。同13～14年、外壁や屋根瓦部分等が修復されています。

ア

第13号　旧小樽倉庫
①色内2-1-20②M23～27③倉庫:木骨石造1階
事務所:木骨煉瓦2階④S60.7.23

色内地先の埋め立て直後に建てられた営業用倉庫のひとつ。正面右手の倉庫が最初の建設で、増築を重ね2つの中庭を囲む大倉庫となりました。寄棟の瓦屋根に鯱をのせた和洋折衷のデザインで煉瓦造の事務所を中心に左右対称に展開し、全体として優雅な美しさをみせています。北側を市博物館、南側を運河プラザに活用、公開されています。

第20号　旧渋澤倉庫
①色内3-3-20②M28③木骨石造1階④H3.7.17

運河北部寄りの倉庫群のひとつ。大きな切妻屋根を架けた本体の前面に2棟の角屋が突き出る変わった形をしています。向かって右手が一番古く明治28年に建てられた棟。その後左棟を並べて建て、次いで2棟をあわせた大屋根を架けて、今の姿になったといわれます。

第21号　旧木村倉庫
①堺町7-26②M24③木骨石造2階④H3.7.17

小樽港の繁栄を示す大規模な石造倉庫で、当初は鰊漁場の中継倉庫でした。内部は中央廊下をはさんで二つの倉庫に分けられ、その廊下には港から引き込まれたトロッコのレールが今も残されています。昭和58年、内部空間を生かした硝子店舗に再利用され、ほかの石造倉庫の転用を促進させました。昭和63年、第1回小樽市都市景観賞を受賞しています。

第22号　旧増田倉庫
①色内3-10-19②M36③木骨石造2階④H3.7.17

小樽運河北端に建つ大規模な木骨石造倉庫です。右隣に旧広海倉庫、旧右近倉庫と大規模な倉庫が並び、切妻面を連ねた小樽港独特の壮観な石造倉庫の往年の景観をしのぶことができます。平成9年に大規模な修復工事が行われています。

イ

第42号　旧島谷倉庫
①色内1-2-17②M25③木骨石造1階④H5.11.24

木骨石造の特徴をよく伝える小さな倉庫です。室内側に木で骨組みを造り、外壁に石を積む構造です。木と石は「かすがい」(鋼の両端を曲げ、先をとがらせたもの)でつないでいます。この構造の建物は、小樽市内に約350棟あったことが平成4年の調査で確認されています。

第43号　旧作左部商店蔵
①住吉町15-3②M初期③土蔵造2階④H5.11.24

1世紀以上にわたり厳しい風雪に耐えてきた建物です。蔵は、母屋に付属し、物を格納するため、耐火構造にすることが必要でした。小樽の蔵は、はじめ土蔵造りが多く、明治後期から次第に外壁に石を張り付ける木骨石造に変わりました。本建築は、屋根や壁など土蔵造りの特徴を伝える代表的なもので、妻壁の植物をあしらう模様は、外壁のアクセントになっています。平成15年に外観が修復されています。

ウ

第51号　旧高橋倉庫
①色内1-2-17②T12③木骨石造2階④H6.5.12

この建物は、大豆を収める倉庫として建てられました。平成元年に改修され、店舗として再生しています。前面は運河に面し、背面は出抜小路に接して建ち、周辺の歴史的景観を形成している建物のひとつです。小屋組は梁を二重に架け、2本の束を陸梁の中央付近で左右対称に立てるクイーンポストトラス(対束小屋組)と呼ばれる洋風の構造です。

第53号　旧日本石油(株)倉庫
①色内3-6-18②T9③木骨石造1階④H6.5.12

小樽運河周辺には、明治から大正期にかけて、木骨石造の倉庫が軒を連ねていました。本倉庫は、その典型的な建物です。小屋組は、クイーンポストトラス(対束小屋組)と呼ばれる洋風の構造です。2本の束が陸梁の中央付近で左右対称に建てられています。平成10年の運河公園オープンに先立ち、新しい石を用いて建て直されています。

第54号　旧日本郵船(株)小樽支店残荷倉庫
①色内3-7-6②M39③石造1階④H6.5.12

日本郵船(株)小樽支店(国指定重要文化財)と同時にこの残荷倉庫も建設されました。工部大学校第一期卒業の佐立七次郎の設計による、一連の建築として貴重なものです。マンサード屋根の小屋組、壁の石積みの仕様などは、支店社屋と共通しています。平成14年に屋根全部と正面外壁部分が改修され、周囲の景観に調和させています。

第63号　旧篠田倉庫
①港町5-4②T14③木骨煉瓦造2階④H7.11.1

本倉庫は小樽運河の海側に建ち、連続した倉庫群を形成する主要な建造物です。煉瓦の壁は、周辺の石やコンクリート壁に対して景観のポイントになっています。構造は、内部の柱や梁を木で組み立て、外壁に煉瓦を積み立てる「木骨煉瓦造」で、小樽の同規模の倉庫では数少ない事例です。運河沿いの壁は、平成8年の改修工事で新しい煉瓦に取り替えられていますが、古い色合いになるよう工夫が施されています。

第64号　旧岡崎倉庫
①1号棟:信香町2-2／2・3号棟:信香町2-24
②1号棟:M38／2・3号棟:M39
③木骨石造1階一部2階④H8.3.27

明治初期、小樽で初めて市街地が形成されたのは、この周辺地区です。本指定は3棟の連続する倉庫が対象です。海側の倉庫は、臨港線拡幅工事で一部を切り取られたため、平成8年に壁が改修されています。この小屋組はたる木を棟から軒桁に架けるだけの「たる木小屋」になっています。3棟の基礎は、土台と柱の腐朽を防ぐため、下部に煉瓦を積み、その上に軟石を重ねている点で共通しています。平成9年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

第65号　旧右近倉庫
①色内3-10-18②M27③木骨石造1階④H8.7.15

明治20年代としては大規模な倉庫で、小屋組にはクイーンポストトラス(対束小屋組)が用いられています。隣の旧広海倉庫、旧増田倉庫との景観はかつての倉庫街の面影を残しています。妻壁の〃は北前船主・右近権左衛門の店印「一膳箸」で船の帆柱に掲げられた船旗にも使われました。平成7年正面の壁が強風で崩れましたが、翌8年に現在の姿に修復されています。

第66号　旧広海倉庫
①色内3-10-19②M22③木骨石造1階④H10.6.8

加賀に拠点をおいた海運商広海二三郎は、本倉庫を大規模な石造り(木骨石造)で建築しました。この土地は、かつて手前まで海岸が迫り、正面の右手の方向に鉄道施設があったことから、海陸ともに荷物の輸送と貯蔵に最適な場所でした。本建築は、荷を積み入れるため奥行きのある長方形で、採光のため屋根の中央と両側に段差を設けています。出入口のアーチは、壁面のアクセントとなっています。

ひとくちメモ①
木骨石造について

小樽には、石造りの歴史的建造物が多く見られますが、中でも、木造の骨組みを持ち、外壁に軟石を積んだ「木骨石造」と呼ばれる構造の建物が大半で、純粋に石積みだけで造られた「本石造」の建物は、少数派です。

構造は、厚さ15cm程度の軟石をかすがいで木骨の軸組に留め、小屋組を架けるというものでした。耐火性能に優れていたため、倉庫をはじめ、店舗や事務所などに広く採用されました。

石材は、「札幌軟石」や「小樽軟石」として知られる凝灰岩が多く使われ、小樽では天狗山、奥沢で採掘されていました。

銀　行

第5号　旧百十三銀行小樽支店
①堺町1-25②M41③木骨石造2階④S60.7.23

小樽支店の設置は明治26年で、当初の店舗はこの通りのもう少し南寄りにありますが、業務拡大に応じ建築されたのがこの建物です。寄棟、瓦屋根で、角地に玄関を設け、上部にギリシャ建築を思わせる飾りを配しているのが特徴です。設計は池田増治郎で、外壁は石張りとなっていましたが、その後外壁に煉瓦タイルを張り現在の姿となりました。

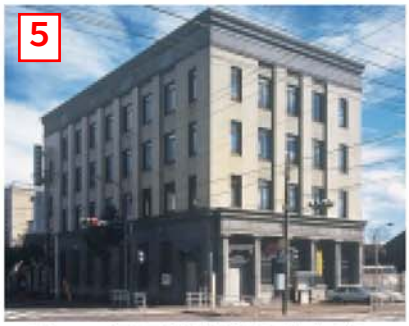
第6号　旧北海道銀行本店
①色内1-8-6②M45③石造2階④S60.7.23

設計は、通りをはさんで建つ日本銀行旧小樽支店(小樽市指定有形文化財)の設計に携わった長野宇平治で、請け負ったのは地元の加藤忠五郎でした。銀行建築独特の重厚さをもち、玄関や窓まわりの石組みデザイン、コーナー部分や窓の間隔の変化などに特徴があります。外観の正面はほぼ創建時の姿で残っています。

第9号　旧第百十三国立銀行小樽支店
①堺町1-19②M26③木骨石造1階④S60.7.23

この建物は、小樽支店として建てられましたが、業務拡大に応じ同41年にこの通りの少し北寄りに支店が移されています。その後、木材貿易商の事務所や製茶会社の建物としても使用されました。平屋建ての比較的小規模な建物ですが、寄棟の瓦屋根に「トンガリ」飾りを付けた和洋折衷の構成で、明治の面影を良く伝えています。軒下に刻まれた分銅模様のレリーフが百十三銀行のシンボルです。

5



第18号　旧三菱銀行小樽支店
①色内1-1-12②T11③鉄筋コンクリート4階④H2.7.5

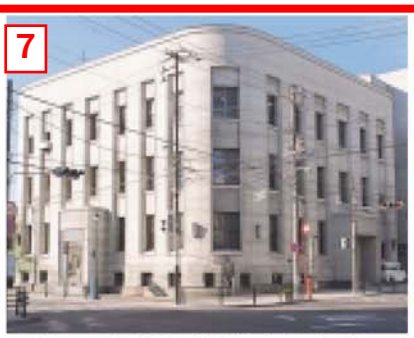
この建物は、かつて、北のウォール街といわれた地区の中心に位置しています。建築当初は、外壁に煉瓦色のタイルが張られていましたが、昭和12年に現在の色調に変更されました。1階正面には、ギリシャ・ローマ建築様式を表すように6本の半円柱が並んでおり、この建物を特徴づけています。

6

第19号　旧安田銀行小樽支店
①色内2-11-1②S5③鉄筋コンクリート2階④H2.12.22

この建物は、第2次世界大戦後、富士銀行が継承した後、昭和45年から新聞社の社屋として使われています。ギリシャの建築様式をもった昭和初期の典型的な銀行建築で、重量感あふれる円柱が特徴です。中央通りの道路拡幅に伴い、平成13年に建物が斜め後方に曳き家され、同時に外観も修復されています。

7



第24号　旧第一銀行小樽支店
①色内1-10-21②T13③鉄筋コンクリート4階④H3.7.17

この建物は、かつて、北のウォール街といわれた地区の中心に位置しています。外観デザインは飾り気のない壁面に改変されていますが、当初は道路側2面に3階通しの大オーダーが立てられていました。現在は洋服工場として活用されていますが、内部の2階吹き抜けの営業室は、もとのまま残されています。

8

第25号　旧第四十七銀行小樽支店
①色内1-6-25②S初期③木造2階④H3.7.17

この建物は、色内大通りに面する銀行建築のひとつです。2階建の小規模な行舎ですが、建築当初は、内部を吹き抜けとし、周囲に回廊が設けられていました。正面に4本の大オーダー（円柱）を立て、壁面をタイル張りとする昭和初期の典型的な銀行スタイルで、創建時の姿をよく残しています。

9

第31号　旧北海道拓殖銀行小樽支店
①色内1-3-1②T12③鉄筋コンクリート4階④H3.10.4

この建物は、小樽経済の絶頂期に建設され、三菱、第一各銀行小樽支店と共に北のウォール街の交差点を飾っています。銀行に貸事務所を併設する当時の道内を代表する大ビル建設で、銀行ホールは2階までの吹き抜けで、6本の古典的円柱がカウンターに沿って立ち、光を受けた様は圧巻です。初期鉄筋コンクリート造建築の道内主要いこう遺構でもあります。平成8年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

第38号　旧中越銀行小樽支店
①入船1-1-2②T13③鉄筋コンクリート2階④H5.11.24

創建の頃、この周辺は入船川の河口（現在は暗渠）であり、海側に船入澗が開け、複数の道路が交わり、交通の要になっていました。昭和18年に合併して北陸銀行となり、同38年に南小樽支店に改称されています。外壁はモルタル仕上げで、2階窓列の壁に褐色のタイルを張り、その上に雷文の模様を一列に並べてアクセントをつけています。

第69号　旧小樽無尽（株）本店
①花園4-1-1②S10③鉄筋コンクリート3階④H14.5.1

この建物は、後に北洋無尽と名称を変え、また、本店を札幌へ移した後も北洋相互銀行、さらに北洋銀行の小樽支店へと変遷し営業を続けてきました。しかし、平成13年、北洋銀行の店舗統合により取り壊される計画が起き、これを知った市民有志がこの建物を自ら買い取り、今では市民の集う建物に活用されています。外観は幾何学的デザインのモダニズム建築であり、八角柱と装飾がその特徴です。

ひとくちメモ②
日本近代建築と北のウォール街

小樽には、日本の近代建築を知る上で、貴重な建築が数多くあります。

日本で最初の建築専門教育機関である工部大学校造家学科（東大工学部建築学科の前身）第1期生の佐立七次郎、辰野金吾、曽禰達蔵をはじめ、長野宇平治、矢橋賢吉など中央で活躍した建築家が小樽に作品を残しています。

彼らが手がけた作品を含め、小樽が北海道の金融、経済の中心として発展した明治後期から昭和初期は、色内地区には中央の大手銀行や地元銀行の本・支店、商社が軒を連ねるように建ちました。金融経済の世界的中心地、アメリカのニューヨーク市マンハッタン地区に「ウォール街」がありますが、これにちなんで「北のウォール街」と呼ばれるようになりました。

小樽市内の主な建築作品とその設計者

旧日本郵船（株）小樽支店
…… 佐立七次郎

日本銀行旧小樽支店
…… 辰野金吾、長野宇平治、岡田信一郎

旧三井銀行小樽支店
…… 曽禰中條建築事務所

旧北海道銀行本店
…… 長野宇平治

旧北海道拓殖銀行小樽支店
…… 矢橋賢吉、小林正紹、山本万太郎

現在の北のウォール街

店　舗

A

第7号　旧名取高三郎商店
①色内1-1-8②M39③木骨石造2階④S60.7.23

山梨県出身の鋼鉄金物商名取高三郎が、明治37年の稲穂町大火後に建てた店舗で、裏手に住宅や倉庫を連ねていました。角地に建ち、西側と南側に開いた形で防火のための袖壁（うだつ）を設けています。外壁には札幌軟石が使用されており、上部壁体を鉄柱で支える構造となっています。小樽の明治後期の代表的商家建築といえます。

B

第8号　岩永時計店
①堺町1-21②M29③木骨石造2階④S60.7.23

この建物は、時計卸商、初代岩永新太郎の店舗として建てられ、店員で編成された楽団を持つハイカラな商店でした。平成3年の改修により正面2階のバルコニー、半円アーチ扉、手摺などが修復され、ほぼ創建時の姿になりました。屋根の装飾、軒の繰り型など細部にもデザインが施され、瓦葺き屋根を飾る一対の鯱は商店では珍しい装飾であり、当時の小樽商人の意気込みが感じられます。平成5年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

第15号　旧早川支店
①色内2-4-7②M38③木骨石造2階④S61.4.11

早川支店は、新潟出身の川又健一郎が茶、紙、文房具を商う早川商店から暖簾分けを受け、現在の場所に開設したのがはじまりで、後に川又商店と店名を変更しています。現在の建物は、明治37年の稲穂町大火で全焼したため再建されたもので、厚い土塗りの防火戸や隣との境界に設けられた袖壁など、防火に対する配慮がうかがわれます。その袖壁には朝日や鶴と亀などの彫刻が施され、繊細な和風意匠でまとめられています。

第17号　旧共成（株）
①住吉町4-1②M45③木骨煉瓦2階④H1.3.29

明治24年創業の共成（株）は、北海道有数の精米、米穀商でした。メルヘン交差点、かつての有幌倉庫群入口にあたる角地に位置します。石造の多い小樽では珍しい煉瓦造の建築で、内部に木骨の構造を組んでいます。壁の褐色の煉瓦、アーチ状窓のキーストーン（要石）や開口部と隅部に積んだコーナーストーンなどが特徴です。家具店舗を経て、現在はオルゴール専門店に再活用されています。平成6年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

第23号　旧上勢友吉商店
①入船1-1-5②T10③石造3階④H3.7.17

小樽では明治末期以降、3階程度の木骨石造が多く建てられていましたが、この商店は小樽に現存する数少ない本石造3階建の店舗建築です。寄棟の瓦葺き屋根にドーマ（屋根窓）を設け、正面壁にキーストーン（要石）を強調した窓を並べた意匠が特徴です。昭和55年に正面1階左端の出入口が窓に改修されています。

第32号　岡川薬局
①若松1-7-7②S5③木造3階④H5.11.24

岡川薬局は、小樽で有数の「薬種売薬」の老舗です。本薬局は信香町から奥沢につながる道路に面して建ち、この辺りは小樽の市街地として早くから開かれたところです。木造モルタル塗り2階建てに、マンサード屋根（2重勾配の屋根）をかけ、ドーマ窓（屋根窓）を設けて屋根裏も使用しています。工期2年のうち基礎工事に1年をかけたと伝えられ、昭和初期の代表的な木造商店建築といえます。

C

第33号　旧久保商店
①堺町4-5②M40③木造2階④H5.11.24

この建物は、小間物雑貨卸を営む久保商店の店舗として建てられました。現在は、和風商店の趣を残しながら喫茶店に再利用されていて、堺町通りの歴史的景観を形成する主要な建物になっています。久保商店時の写真によれば、道路側の下屋は母屋から蔵（木骨石造）まで一体に続き、蔵は前後に2棟並んでいて、母屋の1階は店先として開放できる引戸が入っていました。平成4年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

D

第34号　旧金子元三郎商店
①堺町1-22②M20③木骨石造2階④H5.11.24

金子元三郎商店は、明治・大正期に海陸物産、肥料販売および海運業を営んでいました。店主金子元三郎は、明治32年に初代小樽区長に就任し、その後衆議院議員に数回選出されるなど、小樽を代表する政財界人でした。両袖にうだつを建て、2階正面の窓には漆喰塗りの開き窓が収まり、創建時の形態をよくとどめています。小樽の典型的な明治期商店の遺構といえます。平成5年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

第36号　田中酒造店
①色内3-2-5②S2③木造2階④H5.11.24

田中酒造店（店主田中市太郎）の店舗として昭和2年に建てられ、以来、今日まで営業を続けています。かつての酒造店の店構えを残した数少ない建築で、正面の軒下は腕木を手前に迫り出す「せがい造り」になっています。大正、昭和初期にかけて、この形の屋根が小樽の木造商店に多く見られました。昭和初期の和風店舗を商品の販売、展示をかねながら修復、活用した良い例であり、平成元年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

第37号　渡邊酒造店
①稲穂4-6-1②S5③木造3階④H5.11.24

梁川通りの角地に建ち、この地区のランドマークとなっています。建物の外壁に褐色のタイルを張り、軒先には雷文や卵と槍の模様をつけ、2階窓上には酒樽の看板を掲げています。店内には、天井に模様を型押しした金属板を張り、壁に鏡を飾るなど、昭和初期のモダンなデザインを伝えています。同時期に建てられた田中酒造店は、木造建築で町屋形式の外観をもち、対照的な形態といえます。

E

第68号　旧塚本商店
①色内1-6-27②T9③木骨鉄網コンクリート2階④H13.3.27

本建物は、近江（滋賀県）出身の呉服太物商の店舗として建てられました。小樽では、明治37年5月8日の大火で市街地を焼き尽くしたことから、防火構造の建物が普及しました。本建物も防火のために、外壁をコンクリートで塗り固め、出入口や窓を防火戸で覆う工夫を施し、幾多の災いをしのいできました。昭和63年には、暖簾を張るなど優れた建物の再活用によって、第1回小樽市都市景観賞に選ばれました。

ひとくちメモ③
よく耳にする建築用語

オーダー　古代ギリシャ神殿建築デザインの基本形式で、円柱・台座・柱頭・エンタブラチュア（柱頭の更に上の部分）で一体的に構成された部分。

マンサード屋根　勾配が2段階になっていて、腰が折れたように見える寄棟形状の屋根。フランスの建築家、フランソワ・マンサールに由来する。

うだつ（梲、卯建、卯立）　隣地との境に張り出して設けた高い袖壁のことで、火事の類焼を防ぐための一種の防火用の壁。棟木を支える梁上の短い柱（束）という意味もある。

事務所

F

第10号　小樽商工会議所
①色内1-6-32②S8③鉄筋コンクリート3階④S60.7.23

北海道の発展に寄与する小樽経済界の拠点です。設計は土肥秀二、施工は萬組で、いずれも地元の手によるものです。外装は石川県産千歳石で彫刻が施され、正面玄関には、土佐産の大理石が用いられています。昭和初期における鉄筋コンクリート造の建物として貴重なもののひとつです。

G

第30号　旧三井物産小樽支店
①色内1-9-1②S12③鉄筋コンクリート5階④H3.7.17

戦前の道内事務所建築の代表作で、当時の建築思想を示す国際建築様式の単純明快な意匠です。設計は松井貴太郎（横河工務所）、施工は大倉土木でした。黒御影石の貼られた玄関や1階の壁は、2階以上の白色タイル壁と鮮やかなコントラストを見せ、新鮮な印象を与えます。玄関ホールは琉球産大理石で内装され、正面には2基のエレベーターが設置されています。センターコアとして階段室、トイレなどは各階に集約配置されています。

第39号　旧北海道庁土木部小樽築港事務所見張所
①築港2-2②S10③木造1階④H5.11.24

北海道経済を先導してきた小樽港の発展とともに歩んできた事務所です。初代小樽築港事務所長の廣井勇博士は、小樽築港工事でコンクリートの施工技術の発展に寄与する研究と開発を行い、今日の輝かしい港湾技術の基礎を築きました。小規模（2.5間×3間）ですが、外壁は2種類の板壁を使い分け、方形屋根に小さい屋根をのせるなど、工夫を凝らしています。小樽港縦貫線の道路工事に伴い、平成13年に東寄り約60mの位置から現在地へ曳き家されています。

H

第40号　旧通信電設浜ビル
①色内1-2-18②S8③鉄筋コンクリート4階④H5.11.24

石造倉庫が軒を連ねていた小樽運河沿いに、モダンな鉄筋コンクリートのビルディングとして建てました。昭和初期の建築が装飾に富んでいたことを知るよい例です。建物の正面デザインは、すべて左右対称になっていて、窓の縦枠はアーチを描き、4階までつながっています。玄関周りは花崗岩で飾り、出入口の欄間は幾何学模様を描いています。玄関の両脇に立つ半円の柱に外灯が組み込まれています。

第41号　旧戸出物産小樽支店
①入船1-1-1②T15③木造一部煉瓦造3階H5.11.24

この建物は、富山県に本店のある戸出物産の小樽支店として新築されました。入船七叉路（メルヘン交差点）の一角にあり、外観は左右非対称で、窓周りに垂直性を意識した意匠が施されています。旧社屋裏に煉瓦造3階建の倉庫が続き、一体で活用されています。1階室内には、鉄製の円柱が並び、柱の上に肘木をのせ、2階の床組を支えています。

I

第52号　旧荒田商会
①色内1-2-17②S10③木造2階④H6.5.12

この建物は、荒田商会の本店事務所として建築されました。現在は店舗に再利用されていますが、内壁の漆喰や照明器具、窓枠は創建時の形態を伝えています。石造倉庫が軒を連ねていた小樽運河沿いに建ち、背面の旧高橋倉庫や左隣りの旧通信電設浜ビルなどと中庭でむすび、歴史的景観のまとまりを創っています。

その他

第2号　旧魁陽亭
①住吉町4-7②M29以降③木造2階④S60.7.23

明治初期に開業した料亭で、亭名は創業期の魁陽亭から開陽亭、海陽亭とかわっています。建物は大半が大正期の増築ですが、2階大広間「明石の間」は、明治29年大火類焼時の再建と推定されています。同39年11月、日露戦役による樺太国境画定会議後の大宴会がここで開かれるなど日本史の舞台にも登場し、政財界など多くの著名人が訪れています。

第11号　小樽市庁舎
①花園2-12-1②S8③鉄筋コンクリート3階④S60.7.23

小樽の有力者土肥太吉の10万円寄付を機に新築されました。設計者は小樽市建築課長であった成田幸一郎以下の建築課スタッフで、土肥秀二もかかわったといわれています。外壁はタイル張りで、正面入口の車寄せ部分とその周辺を茨城産花崗岩積みとした近代建築です。正面上部に彫刻を施した6本の柱を配し、内部中央階段の正面はステンドグラスで彩られ、重厚な市庁舎となっています。

ひとくちメモ④
映画の中の小樽

「絵になる風景」や「懐かしいたたずまい」を求めて、小樽を題材とした映画の撮影が数多く行われ、様々な歴史的建造物が登場しています。

1995（平成7）年に公開された「Love Letter」（岩井俊二脚本・監督、中山美穂・豊川悦司出演）では、主人公（中山美穂）の住む家として旧坂別邸（指定番号　第48号）と旧寿原邸（第27号）が撮影場所に利用されました。また、小樽市庁舎（第11号）が「小樽厚生病院」の名前で、旧日本郵船（株）小樽支店（国指定重要文化財）は司書役の主人公が勤める市立図書館として、それぞれ登場しました。

第12号　旧小樽区公会堂
①花園5-2-1②M44③木造1階④S60.7.23

明治44年、皇太子（後の大正天皇）の本道行啓に際してのご宿泊所として建てられました。この時、小樽区へ寄付を申し出たのが、海運商として名を馳せた藤山要吉です。工事を請け負ったのは小樽の棟梁加藤忠五郎（大虎）です。建物は和風の建築様式で、御殿、本館、付属建物からなります。行啓後公会堂として活用されますが、市民会館建設に伴い、昭和36年に現在地に移築されました。この時、御殿と本館の配置が変わり、地下部分が増設されています。

旧岡崎家能舞台
①花園5-2-1②T15③木造1階④S60.7.23

荒物雑貨商として財をなした岡崎謙が、大正15年、入船町の自宅中庭に建てたもので、後に市に寄贈され、昭和36年、公会堂隣接の現在地に移されました。檜の舞台をはじめ要所には佐渡産神代杉が用いられ、格式にのっとった能舞台で東北以北唯一のものといわれています。鏡板の老松、唐獅子、若竹は狩野派17代兼信が描いたものです。大正15年1月舞台開きを皮切りに芸道研鑽のため中央から再三家元を招いて能楽を開催したといわれます。

第16号　旧越中屋ホテル
①色内1-8-25②S6③鉄筋コンクリート4階④S63.7.15

越中屋は、明治30年代以降の英国の旅行案内書にも載った旅館です。この建築は外国人利用客のための別館で、国際貿易港小樽を象徴する建築のひとつです。正面から見る姿は、中央にある縦2列のベイウィンドウや両脇の丸窓と垂直の窓割りなどが特徴です。また内部にちりばめられているステンドグラスに第一次大戦後のアール・デコ様式の影響がみられます。設計は倉澤国治です。

第45号　旧高島町役場庁舎
①高島4-1-1②S10③木造2階④H5.11.24

この建物は、高島町役場として新築されましたが、昭和15年の小樽市との合併により小樽市役所高島支所となり、同21年からは診療所として使われています。外壁は石綿セメント板を下見板風に羽重ねし、ネジ留めしています。1、2階を通した窓額縁、その間のパネルのメダル状装飾などが、洋風建築の趣を伝えています。設計は小樽市営繕課スタッフの野村秀平で、施工は地元高島の日根組です。高島町時代のシンボルとして地区の大切な建物となっています。

第46号　旧花園町会館
①花園4-3-8②S2③木造2階④H5.11.24

会館の維持管理は、周辺の6町内会が出資する有限会社でおこなっています。外観正面は、左右対称のデザインとなっています。縦長の正面は、マンサード屋根のつく玄関から2階上部小屋裏の窓上まで、変化のある形が並び、切妻の三角屋根をのせています。設計者は地元小樽の萩原米治郎です。平成12年に外壁や屋根などの補修工事が施されています。

第47号　潮見台浄水場管理棟
①潮見台4-143②S2③鉄筋コンクリート1階④H5.11.24

潮見台浄水場は、朝里川（朝里ダム）を水源とし、入船や松ヶ枝方面へ送水するために造られました。工事は、大正11年7月に始まり、昭和2年12月に完成しました。小樽の水道施設では、奥沢浄水場に次いで2番目のものです。管理棟は、八角形の平面上に、子供の絵本に出てくるようなとんがり帽子状の尖頭屋根をのせ、周りの自然と調和した建物になっています。出入口のアーチの上には、小樽の市章が掲げられています。

ひとくちメモ⑤
小樽で最古の建築は

現在、小樽市内に残っている歴史的建造物の中には、今から約150年余り前の江戸時代末期に建てられたものがあります。

忍路神社境内にある津古丹稲荷神社本殿は、1849(嘉永2)年の創建で、小樽では最古のものとされています。なお、この建物は、昭和13年に国道工事のためにいったん解体され、同15年に現在地に移築されています。

次に古いものは、祝津にある恵美須神社本殿(指定番号　第58号)で、1863(文久3)年の創建とされています。

第62号　旧白鳥家番屋
①祝津3-191②M10代③木造1階④H7.8.28

祝津は、北海道の初期漁村集落の様子を伝える貴重な地区です。海岸沿いに鰊漁家の住宅、番屋、倉庫などが建ち並び、丘には神社があります。旧白鳥家番屋は主人と漁夫の住居部分が大屋根で一体になっています。主人のすまいには、床の間や欄間を設け和風住宅の特徴を示します。漁夫の寝床は、吹き抜けに巡らされていました。大工は大棟梁が小林秀作、脇棟梁が土門倉次です。平成7年に料理店に再利用され、翌年、小樽市都市景観賞を受賞しています。

ひとくちメモ⑥
鰊漁と祝津の三大網元

日本海沿岸は、鰊漁で栄えた時期がありました。昭和30年ごろまでは、春になると鰊の大群が産卵のため沿岸に押し寄せ、海が真っ白に濁ったといいます。この様子を群来といいました。この鰊を求めて本州から大勢の「やん衆」と呼ばれる出稼ぎ漁夫が集まり、浜は活気に満ちあふれました。

漁場を経営する網元の中でも、富を築いた青山家、茨木家、白鳥家が、祝津の「御三家」と呼ばれ、漁のほかにも地域の学校建設に資金を提供するなど、まちづくりにも貢献しました。

祝津地区には、旧青山別邸(指定番号　第3号)や旧白鳥家番屋(第62号)をはじめ、旧漁家の番屋や倉庫など当時の網元が建てた建物が今なお残っているほか、北海道開拓の村(札幌市厚別区)には、旧青山家漁家住宅が移築されており、往時を偲ぶことができます。

文化財〔建造物関連〕

〈国指定重要文化財〉　旧日本郵船(株)小樽支店
①色内3-7-8②M39③石造2階④S44.3.12

設計は工部大学校造家学科の第一期生、佐立七次郎です。近世ヨーロッパ復興様式の純石造建築で、外観は2色の石を組み合わせ重厚なデザインに統一されています。当時この建物前面には専用の船入澗、輸出入倉庫があり、建物の裏側には鉄道が走るなど海運業としての施設が完備されていました。日本郵船は昭和29年まで営業していましたが、同30年に市が譲り受け、その後、同59年から3年間全面的な修理復元工事を行い当時の雰囲気を再現しました。

〈国指定重要文化財〉　旧手宮鉄道施設
①手宮1-3-2②M18③煉瓦造1階④H13.11.14

北海道最初の鉄道は米国人技師ジョセフ・U・クロフォードの指揮のもと、明治13年、手宮ー札幌間に敷かれました。2年後には幌内(三笠市)まで開通し、この鉄道によって積み出された石炭は、小樽港から本州などに運ばれ、日本の近代化に大きく貢献しました。施設は、機関車庫3号(現存する日本最古の煉瓦造機関車庫、扇形平面形式)、機関車庫1号、転車台、貯水槽、危険品庫、擁壁から構成され、蒸気機関車が主流であった時代の鉄道システムを現在に伝えています。

〈北海道指定有形文化財〉　にしん漁場建築
①祝津3-228②M30③木造2階④S35.5.31

明治から大正にかけて日本海沿岸では鰊漁で大いににぎわいました。この建物は、積丹半島の泊村で鰊漁場を経営していた田中福松の住居兼作業場の宿舎として明治30年に建てられ、その後、昭和33年に現在の祝津へ移築されたものです。外観の特長は、大屋根中央の切妻造りの天窓や伽藍調を帯びた大屋根の庇などで、豊富な道産の木材を使った梁や柱、また東北地方から取り寄せたと思われる檜などがふんだんに使われ、当時の網元の財力の一端をうかがい知ることができます。

1

〈小樽市指定有形文化財〉　日本銀行旧小樽支店
①色内1-11-16②M45③煉瓦造2階④H14.9.17

小樽に日本銀行の派出所が開設されたのは明治26年のことで、平成14年の支店営業廃止まで、地方経済の発展に重要な役割を果たしました。この建物は支店昇格後に建てられ、設計は日本近代建築の先駆者である辰野金吾、長野宇平治、岡田信一郎です。小屋組には八幡製鉄所製、床にはイギリス製の鉄骨を用い、当時、最先端の技術が使われました。石造り風の外壁は、煉瓦造りの壁にモルタルを塗ったもので、屋根は銅板葺きです。平成15年から、金融資料館として公開されています。

■平成24年度　『小樽市指定歴史的建造物』に追加された建造物（３棟）

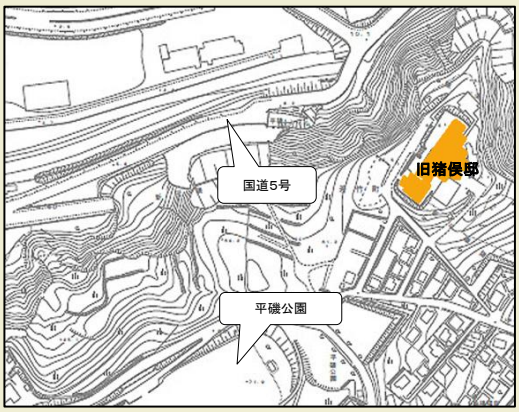
凡　例　指定番号　建物の名称
①所在地 ②建築年 ③構造 ④指定年月日

邸 宅

第 75 号　旧猪俣邸（いのまた）

①桜1－1
②M33
③木造2階
④H24．10．19

この建物は、鰊（にしん）漁を中心に財を成した猪俣安之丞（やすのじょう）の邸宅として、明治33年に余市町に建てられました。現在地には昭和13年、東小樽の宅地計画の一環として移築されました。この母屋（おもや）は猪俣家専用の住宅であり、多くの大規模な鰊漁家（ぎょか）が親方の住居と漁夫の寝床を合わせている点で異なります。また、これほど大きな親方の住宅は、道内に例をみません。母屋の中央にある望楼（ぼうろう）からは、沖合の漁を観察していたと思われます。玄関の右手には、6室の座敷が並び、大きな神棚や床の間を備えています。



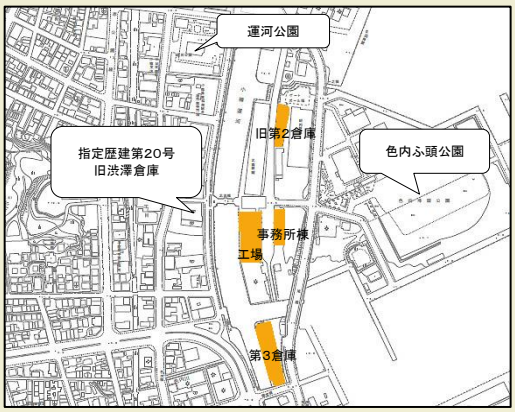
- 建物位置図 -

倉 庫 / 工 場 / 事 務 所

第 76 号　旧北海製罐倉庫（ほっかいせいかん）（株）

①旧第２倉庫 他２棟：色内3－1
　第3倉庫：港町4－6
②旧第2倉庫：T11
　第３倉庫：T13
　工　　場：S6
　事務所棟：S10
③鉄筋コンクリート造
④H24．10．19

小樽運河の東側埋立地に建ち並ぶ主な施設は、大正10年代から昭和10年にかけて建てられ、小樽の鉄筋コンクリート造では初期の建物です。旧第2倉庫は、現存する施設で最も古く、当時の埋立地の形状に合わせ外壁が一部曲面しています。第3倉庫は、建築当初から荷物を揚げ降ろしするためのエレベーターや製品を運河へ搬出するためのスパイラルシュートがあり、機能的な設計がされています。工場は、柱と梁（はり）の骨組に窓を組み込んだシンプルな外観です。事務所棟は、横長の連続窓が近代建築の特徴を表しています。



- 建物位置図 -

倉 庫

オ

第 77 号　旧浪華（なにわ）倉庫

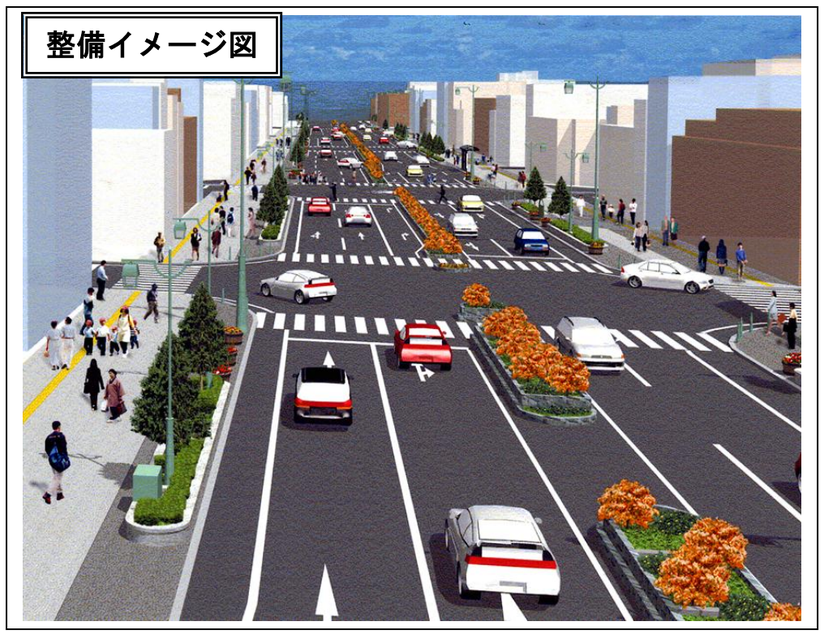
①港町6－5
②T14
③木骨石造1階
④H24．10．19

市内に現存する木骨（もっこつ）石造の倉庫の中でも比較的大規模な建物です。小屋組は、クイーンポストトラス（対束（ついづか）小屋組）と呼ばれる洋風の構造で、屋根には当時採光用として設置された円形の小屋根があります。荷物を搬出入する開口部は、海側の壁面以外に運河側にも配置され、艀（はしけ）へ荷積みする利便さが図られています。運河の完成の2年後に建てられたこの建物は、運河の盛衰を見守りその歴史を今に伝える倉庫建築のひとつです。

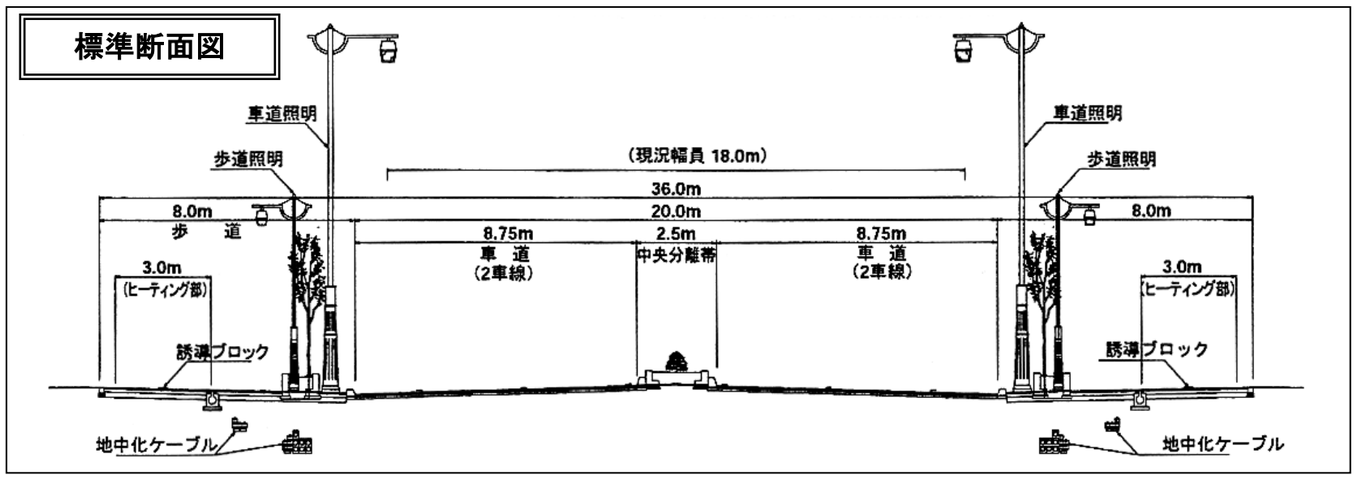
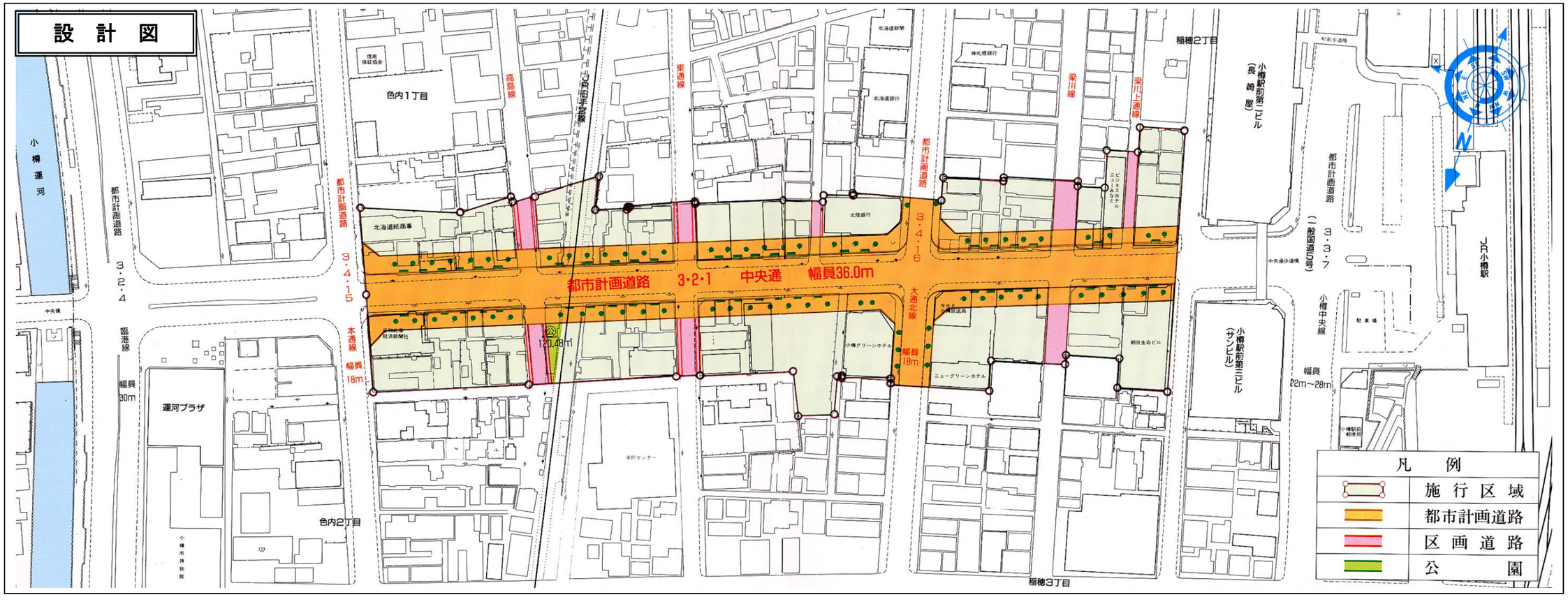
- 建物位置図 -

中央通地区土地区画整理事業　資料図

整備イメージ図



標準断面図



設　計　図